

## 京都ハリストス正教会生神女福音聖堂の建築経緯について

石川 祐一

### 1. はじめに

京都ハリストス正教会生神女福音聖堂は、明治36年（1903）に建築された。日本正教会の本格的な大規模木造聖堂としては現存最古の教会堂建築であり、昭和61年（1986）に京都市指定有形文化財に指定されている。これまで同聖堂については、建築家・松室重光の設計・監理によるものであるとされてきた<sup>1)</sup>。この建設経緯については、平成19年（2007）に『宣教師ニコライの全日記』の邦訳が刊行されたことで、同資料の分析から、①ロシアにおいて作成された図面集が存在すること、②ニコライ主教がロシアから持参した同図面集に基づき松室が実施設計を行ったことなどが、いくつかの論考により報告されている<sup>2)</sup>。

京都ハリストス正教会では、平成27年度事業（京都指定文化財の補助事業）として聖堂の外壁塗装の復原等の修理を実施した。この際、京都市文化財保護課は古写真等の他、雛形となったと考えられる図面集の提供をハリストス正教会より受けることができた。

本稿では、既往研究の整理及び確認された図面集から、京都聖堂の建築経緯について報告し、京都ハリストス正教会聖堂の文化財的評価の再考を行いたい。加えて、外

壁塗装工事について報告する。

### 2. 京都聖堂の建築経緯

日本ハリストス正教会の京都における布教は明治20年（1887）頃に始まり、同29年に京都聖堂の建設が決定された。この決定から聖堂の竣工までの経緯をニコライ主教の日記（『宣教師ニコライの全日記』）<sup>3)</sup>から追ってみたい。

#### （1）土地購入～基本設計案の決定

明治31年（1898）7月16日（28日）、5,500円の価格で土地購入の話がまとまり、同21日に土地の登記が終了した<sup>4)</sup>。

明治33年（1900）7月24日、京都に到着したニコライ主教は、シメオン三井道郎神父と聖堂建設について協議している。その際、信徒のイオフ高田（九郎）から、同志社の建築に参加した小島という請負人と、建築家の松室重光を紹介された。ニコライ主教は当初、木造の小さな聖堂を想定していたが、簡素な建物は京都にそぐわないと判断し、300人収容を計画する。持参した「建築図の冊子」のうち、鐘楼の無いタイプの図面を見せたが、鐘楼が必要とのシメオン三井神父の意見により、鐘楼付きタイプに変更した<sup>5)</sup>。翌日には、シメオン三井神父との話し合いにより、将来的な発

展を見越して450～500人収容に変更している。なお、請負人については、小島よりも信用の高い大西に発注することにし、見積書作成のため大西に建築図を渡している<sup>6)</sup>。

## (2) 実施設計

明治33年(1900)7月28日(8月10日)、ニコライ主教は建築家の松室重光と面会し、教会堂とイコノスタスの図面を渡した。また、請負人の大西による見積もり書を示した。その際、松室と次の4点を約束している。①教会堂と4棟の日本家屋(司祭用の2棟、信徒集会所などの2棟)の詳細図面、及び煉瓦塀の図面を1ヶ月間で作成すること、②作成した図面は東京に送付しニコライの承認・変更指示を受けシメオン神父が建築申請の手配をすること、③請負人に見積もりを出させニコライ主教が承認すること、④建築家(松室)が請負人を自由に行使できること、である。当日、松室の助手が建設地を訪れ、敷地を測量している<sup>7)</sup>。

ニコライ主教と松室との協議から、基本設計として建築図が既に存在しており、同図を基に既に請負業者の見積もりを得ていることが分かる。また、現地の敷地を測量した結果、基本設計図である「建築図」を実際の敷地規模に合わせて修正し、実施設計(詳細設計)を行なっているものと考えられる。

8月30日(9月12日)には、東京に居るニコライ主教の元に、京都のシメオン神父から教会堂及び附属建物の図面が送付された。これは松室が約束通り約1ヶ月間で「建築図」を基に実施設計図を作成した

ものと考えられる<sup>8)</sup>。10月13日(26日)には、6人の請負業者からの見積り書がニコライ主教に送られ、大西が最も安価であったことが記されており<sup>9)</sup>、工事請負人が決定されたと思われる。

## (3) 着工～竣工

明治33年(1900)12月6日(19日)には建築申請の書類が作成されているが、この時既に基礎工事は着工されていたことが記されている<sup>10)</sup>。明治34年4月21日には成聖基礎式が行われている<sup>11)</sup>。明治34年(1901)11月23日(12月6日)の日記には教会堂の建物が既に「落成」していることが記され<sup>12)</sup>、イコノスタスと鐘を除き建物が竣工していることが分かる。

なお、同12月13日(26日)の日記では、請負人の大西が追加請求を行なうなどしてトラブルとなっていること、その一方松室の献身的な働きが賞賛されている<sup>13)</sup>。

## (4) イコノスタスの製作

明治36年(1903)2月26日(3月11日)、ロシアから神戸に到着していたイコノスタスと鐘が、京都に運ばれた。梱包を開封したところ聖龕に毀損が見つかり、松室が呼ばれてイコノスタスと鐘の設置について協議した<sup>14)</sup>。翌27日(3月12日)には指物師が呼ばれ、イコノスタスの修理が始められた<sup>15)</sup>。同28日(3月13日)、イコノスタスが聖堂の寸法より約35cm長いことが分かり、折り曲げて設置することになった<sup>16)</sup>。3月1日(14日)から3日(16日)にかけてイコノスタスが設置され、その後毀損部分の修復が行われた<sup>17)</sup>。現在、京都聖堂のイコノスタスは両端が折り曲げら

れているが、これは聖堂の平面寸法よりも長いサイズで製作されたことに起因することが同日記より確認できる。3月23日（4月5日）には、京都からの電報によりイコノスタスの修理が完了したことを知る<sup>18)</sup>。そして4月27日（5月10日）、聖堂の成聖式が執り行われた<sup>19)</sup>。

### 3. 雛形となる建築図面集の存在

『宣教師ニコライの全日記』の記述から、京都聖堂の設計に際しては、雛形となる「建築図の冊子」が存在し、同図面を基に松室重光が実施設計を行なったことが確認された。この「建築図の冊子」については、これまでその存在が指摘されていたが、今回、現仙台ハリストス正教会のセラフィム辻永昇 大主教が建築図面集を発見し、コピーを入手していることを確認することができた。

辻永氏は、ウクライナ東部のロストフナドヌーのカピノス設計事務所所蔵の図集を発見し、同事務所からそのコピーを入手している。これは、「教会外観及び正面の設計図 附属するイコノスタシスの設計図、会堂の設計図（集落部における教会建設の際に推奨できるもの）」（以降、「教会外観及び正面の設計図」と称する。）と題され、目次やキャプションは全てロシア語で記載されている。刊行年は明治32年（1899）で、モスクワの「聖シノド印刷所」によるものである。「教会外観及び正面の設計図」中の図案には、No.1～46までの番号が付され、No.1～32までが教会建築の図案（立面図、平面図、断面図）、No.33～37が屋根、扉、柱頭飾りなどの細部意匠、No.

38～46にはイコノスタスの図案が掲載されている。

辻永氏は、「教会外観及び正面の設計図」の編纂者が建築家であるコンスタンチン・トーンであること、トーンは1836年（天保6年）にロシア正教会宗務院の依頼によって最初の「聖堂図面見本集」を編纂していること、その目的はロシア帝国全土に建設されていく聖堂の「フォームとスタイルが然るべき形で維持されるため」であったと述べている<sup>20)</sup>。

また、辻永氏は、「教会外観及び正面の設計図」には、刊行年である1899年（明治32年）以降の日本の正教会聖堂の原型が見られることを指摘し、その事例として、大阪聖堂（No.19）、松山聖堂（No.21）、函館聖堂（No.28）、京都聖堂及び豊橋聖堂（No.22）等をあげている。さらに、正教会の聖堂建設に際しては、構造形式、収容人数、類型（塔の有無など）に応じて図集からタイプを選択することにより、ある程度機械的に基本設計案を示すことができたとする<sup>21)</sup>。

京都聖堂の雛形と考えられる図面No.22（図2）のキャプションには、「木製教会の見取図」、「収容人数450～500人」と記載されており、京都聖堂が最終的に450～500人の収容人数に変更されたことと符号する。図面No.22の立面図と現状立面図（図1）を比較すると、入口部分の円柱の装飾など微細な部分を除けば、ほぼ一致していることが分かる。平面図（図1）についても図面No.22の縮尺が不明であるものの、形状はほぼ一致している。

このことから、①ニコライ主教とシメオン神父によって構造、収容人数、鐘楼のあ

る形式等の基本条件が決定され、「教会外観及び正面の設計図」の図面No.22が選択されたものと考えられる。また、松室重光はニコライより提供された図面No.22を基に、敷地条件に合わせて実施設計を行っており、このため約1か月という短期間での実施設計が可能であったものと推察されるのである。

『正教新報493号』には「京都ハリストス正教会聖堂新築工事設計図」(図3)と題する京都聖堂の西側及び南側立面図、平面図が掲載され、100分の1の原図を350分の1に縮小したものと記載されている<sup>22)</sup>。同図は建具意匠などを省略しているものの、平面及び立面図が現状と一致することから、基になる原図は松室重光が実施設計図として作成したものの一部であると考えられる。

#### 4. 京都ハリストス教会聖堂の位置付け

先行研究や雛形図面の発見から、京都聖堂の位置づけを再検討してみたい。これまで京都聖堂の設計は松室重光とされ、後の豊橋聖堂、松山聖堂等のプロトタイプとなったと考えられてきた。しかし、正教会の設計には雛形となる図面集が存在しており、京都聖堂においてもロシアからもたらされた「教会外観及び正面の設計図」から建築図案が選択されて基本設計案となったことが分かる。松室は敷地条件に合わせた実施設計を短期間(約1ヶ月間)で行なっており、同設計資料の一部と考えられる図面も確認することができる。

また、京都以外の聖堂についても、松山

聖堂(明治41年(1908))、大阪聖堂(明治43年(1910))、豊橋聖堂(大正2年(1913))などのように<sup>23)</sup>、構造、収容人数、外観の類型等など諸条件に応じて「教会外観及び正面の設計図」から選択された基本設計案に基づくものが確認される。

京都聖堂は、雛形となる「教会外観及び正面の設計図」に基づく設計過程を日記等の資料及び実施設計図から追うことができる事例として重要である。こうしたロシアから移入された雛形に基づく正教会建築としては、確認される範囲では最初の事例であり、現存最古の遺構として、極めて重要な遺構であると評価することができる。

#### 5. 外壁塗装の復元的修理について

京都ハリストス正教会生神女福音聖堂では、京都市の補助事業として、平成27年(2015)10月～平成28年(2016)3月において外壁塗装、一部内壁下地修理などの修理事業が実施された(施工：伸和建設)。外壁塗装は、今回の修理以前にはやや緑がかった水色となっていた(写真1)。昭和53年(1978)発行の絵葉書では外壁は白色に写っており(写真2)、また、竣工時資料には「東山の緑翠に對せる灰白色」と記載されていることから<sup>24)</sup>、外壁塗装修理に際して塗装色の変更を行なった(写真3)。

塗装色を決定するに際して数か所の外壁部分の部材にサンドペーパーをかけたところ、白色部分が確認されたが、明確に当初の塗装であるとの判断には至らな

かった。一方、2階鐘楼部分の内部に当初の塗装と考えられる白色部分が確認でき、塗装修理時の基準色とした。

修理以前には、西側正面及び南北側面の入口部分の柱は下見板と同色（水色）で塗装されていたが、竣工当初の写真（写真4）では白色塗装はなされておらず、木材の色が現れているものと判断された。今回の修理では塗料を完全に剥がして木の肌面を露出することが困難であったため、同部分は既存塗装の上に木調に見える茶色の塗装を施した（写真5）。同様に1階窓枠下端部の装飾部分も、昭和初期頃と考えられる古写真（写真6）を参照し、木調に見える茶色の塗装を施した（写真7）。

以上の修理工事は、外壁塗装を主とした部分修理であるものの、資料や部材の痕跡など文化財的評価を行う上で重要なデータを得ることが出来た。外壁塗装については、現段階において入手可能な根拠による復元的な修理として、一定の評価を与えることができるのではないと思われる。新出資料による建築経緯についての成果と合せ、京都ハリストス正教会生神女福音聖堂の文化財的評価を高めるものと期待したい。

## 謝 辞

建築調査や資料の提供・掲載について全面的にご協力頂いた京都ハリストス正教会のパウエル及川信 長司祭、「教会外観及び正面の設計図」を提供及び掲載の許可を頂いた現仙台ハリストス正教会のセラフィム辻永昇 大主教には大変お世話になりました。深くお礼を申し上げます。

## 註・参考引用文献

- 1) 水場行楊 編『京都至聖生神女福音聖堂の記念畫帖』、1904年 には「聖堂建築の技師は松室氏」と記載されており、その後のパンフレット等にも松室重光の設計によるものと紹介されている。また松室の建築作品に関する論考として、石田潤一郎・中川理「松室重光の事績について」『日本建築学会学術講演梗概集』1984年10月、pp.2671-2672 等がある。
- 2) 泉田英雄・伊藤晴康・西澤泰彦「豊橋ハリストス正教会の聖堂建築の研究 最近発見・発刊された資料による建設経緯と設計の分析」『日本建築学会計画系論文集』第654号、2010年8月、pp.1997-2005 では、豊橋ハリストス教会の建築経緯を考察する中で、同教会に残る立面図が、ニコライがロシアから持参した参考図集にあたるのではないかと推察されている。同様に、池田雅史『ユーラシアブックレット ニコライ堂と日本の正教聖堂』、東洋書店、2012年、pp.20-21 は、ロシアの宗務院が作成した聖堂のモデル図面に、京都や豊橋の正教会聖堂に酷似したものがあり、ニコライがロシアから持参した図面には地方向けの雛形もあることを指摘している。また、赤浦真珠「京都ハリストス正教会の聖堂建築の基礎的研究」『日本建築学会東海支部研究報告集』第51号、2013年2月、pp.717-720 では、『宣教師ニコライの全日記』の分析から、京都聖堂の建設経緯が考察されている。
- 3) 『宣教師ニコライの全日記』は、1979年にレニングラード（現サンクト・ペテルブルク）の中央国立図書館に保管されていたニコライの手書き日記現本を判読したものである。帝政ロシアではユリウス暦が用いられており、日記原本も同暦による日付が記載されている。刊行された『宣教師ニコライの全日記』ではグレゴリオ暦による日付を（ ）内に補足しており、本稿にお

- いてもこれを踏襲する。
- 中村健之介 監修『宣教師ニコライの全日記 1  
1870年～1880年（ロシア帰国時の日記）』凡  
例，教文館，2007年，pp.74-75。
- 4) 中村健之介 監修『宣教師ニコライの全日記 5  
1897年7月～1899年6月』，教文館，2007  
年，p.178。
- 5) 中村健之介 監修『宣教師ニコライの全日記 6  
1899年7月～1901年6月』，教文館，2007  
年，pp.149-150。
- 6) 前掲4)，pp.150-151。
- 7) 前掲4)，pp.154-155。
- 8) 前掲4)，pp.167。
- 9) 前掲4)，pp.181-182。
- 10) 前掲4)，pp.212。
- 11) 『正教新報488号』明治34年4月1日，pp.18-  
19。
- 12) 中村健之介 監修『宣教師ニコライの全日記 7  
1901年7月～1903年』教文館，2007年，  
pp.64。
- 13) 前掲10)，pp.70。
- 14) 前掲10)，pp.240-241。
- 15) 前掲10) p.241。
- 16) 前掲10) p.241。
- 17) 前掲10) pp.241-242。
- 18) 前掲10) pp.250。
- 19) 前掲10) pp.261-265。
- 京都ハリストス正教会 編『京都ハリストス正  
教会 開教100周年記念誌1978』，1978年，  
p.21 においても同式が5月10日に執行され  
たことが確認される。
- 20) パンフレット  
『初代聖堂焼失から二代目聖堂完成まで（1907  
～1916） 函館ハリストス正教会復活聖堂100  
年』，pp.15-17。  
『函館ハリストス正教会史ー重使徒日本の大主  
教聖ニコライ渡来150年記念』函館ハリストス  
正教会史編集委員会，2011年。  
から抜粋して作成。
- 21) 前掲16)，及びセラフィム辻永昇 大主教から  
の示唆による。
- 22) 『正教新報493号』（明治34年6月15日）表紙  
裏挿図
- 23) 前掲2) 池田，pp.21-22 ほか。
- 24) 水場行楊 編『京都至聖生神女福音聖堂の記念  
畫帖』，1904年，p.8。

いしかわ ゆういち  
石川 祐一（文化財保護課 主任（建造物担当））

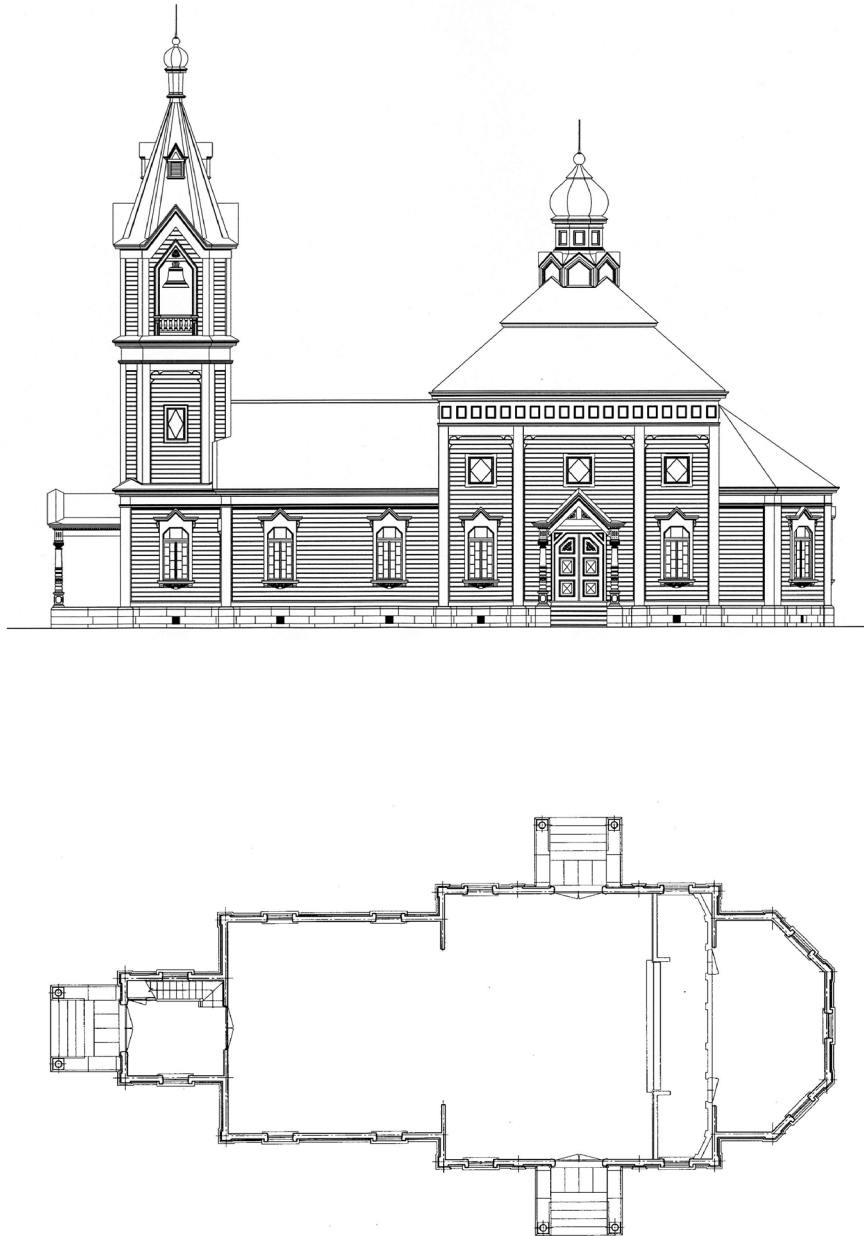
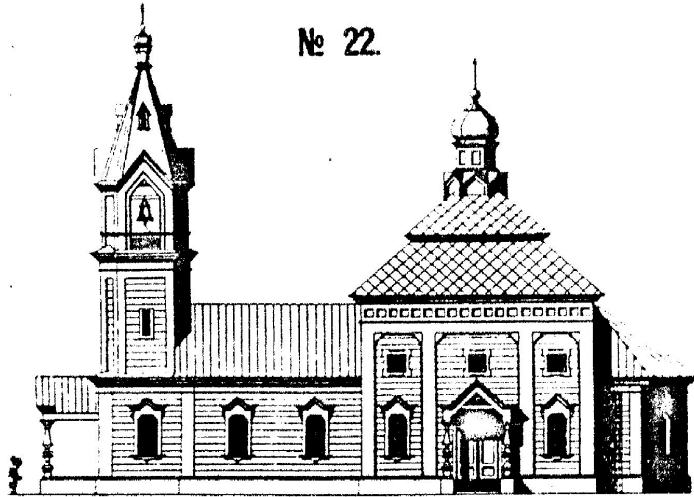


図1 京都ハリストス正教会生神女聖堂 現状立面図（上），現状平面図（下）  
（いずれも伸和建設株式会社作成）

ДЛЯ ЦУРКА А В ДУАГ ПЕРВАЯ ЧАСТЬ

отъ 450 до 500 человекъ.

№ 22.



Сторона по линии А В.

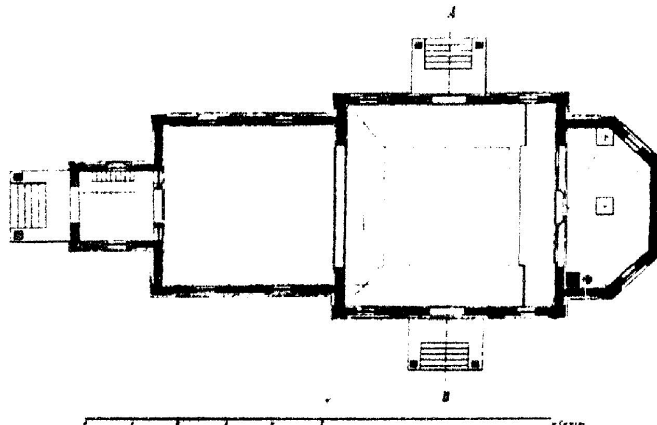
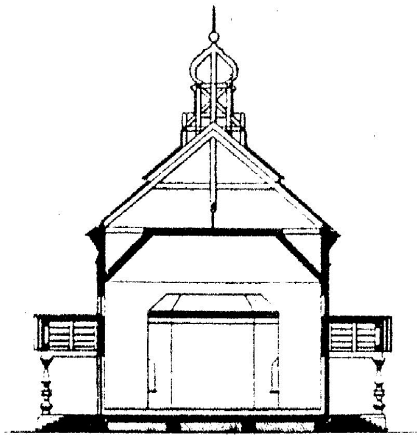


図2 「教会外観及び正面の設計図」 №22

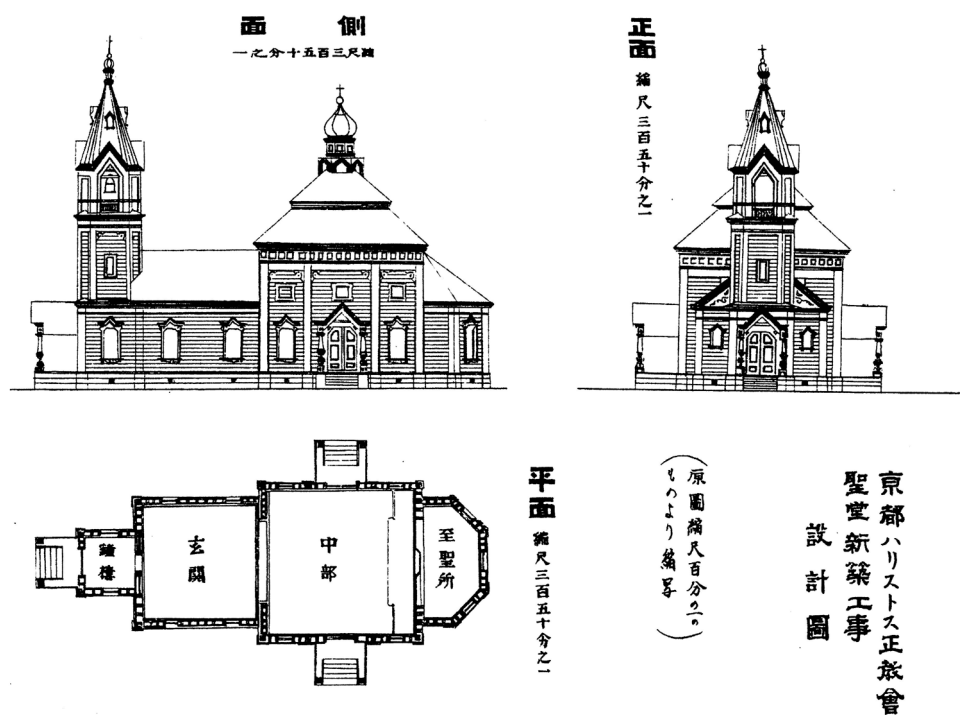


図3 「京都ハリストス正教会聖堂新築工事設計図」



写真1 修理前外観(2015年8月)



写真2 昭和53年(1978)頃の外観



写真3 塗装修理後外観（2018年1月）



写真5 入口柱部分塗装

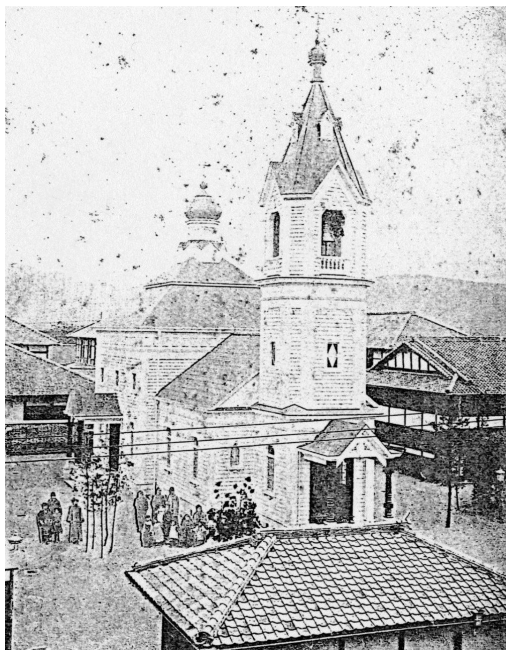


写真4 竣工当初外観  
（『京都至聖生神女福音聖堂の記念畫帖』）



写真6 昭和初期頃写真（京都ハリストス正教会所蔵）



写真7 1階窓框下裝飾塗装（修理後）→